

ビク、各異相セリ、略下

〔新猿樂記〕持物道祖祭似少應野干坂伊賀專カウ之男祭叩匏苦本舞

〔燕石雜志〕恠刀禰九尾附

狐を野干ヤカンといふよしは、和名抄云、狐考聲、切韻云、狐音胡、和名木豆禰、獸名射干也、關中呼爲野干語訛也、と

抄せり、亦野干は狐に似て、好て樹に登るもの也といふ、神記、萬葉集に、野干玉と書てぬばたま

と訓じたるは、狐は、陰獸にして夜をむねとすればなるべし、又きつねの異名をまよほし鳥とい

ふは、人を魅すものなれば也、又伊賀專カウともいへるよし、新猿樂記に見えたり、一説に伊賀にて白

狐を專御前タウゴと唱るといへり、是は伊賀といふ文字につきていふ歟、信じがたし、專カウは和名太宇女

老女の一稱なるよし、和名抄に見えたり、唐山の古説に、狐は千古の淫婦也、その名を阿紫といふ

といへれば、こゝにも專カウと呼にやあらん、河海抄に、刀女は狐なりといへり、

〔百練抄後五三條〕延久四年十二月七日、藤原仲季、勤罪名、配流土佐國、於齋宮邊、依射殺白專女也、

〔山槐記〕治承三年正月十一日、齋宮自野宮退下、略中、去年坐一本御書所之間、五月十三日見付白專

女、狐之之恐也誤被射殺、略下

〔本朝食鑑十一〕狐訓喜津禰、或訛稱化津禰、略中

狐性質
狐形體

集解、狐之多疑、妖魅媚惑、衆人所常識也、有黃黑白駁、色白者尤稀、尾有白錢、文者亦稀、腋腹白者儘有、

凡晝伏穴、夜出竊食、聲患如兒啼、聲喜如打壺、故民俗聞其鳴聲而卜吉凶、其氣極燥烈、其失氣亦惡臭、

不可當、若人驅犬逐之、窘迫必失氣、當其失氣、則人惱大迷、不能近之、若夜行忽見野火、其青燃者、狐尾

放火也、或謂狐取人之髑髏、馬之枯骨、及土中之朽木、以作火光、而未詳、略中、自古流俗傳稱、狐者稻荷

之神使也、天下之狐、悉拜詣洛之稻荷社、能超華表、能作妖魅、其妖術之長、從其長者、神授位階者、有品

予必平野、昔聞老祝之言、曰、稻荷神者、素盞鳥之子、稻倉魂之靈、上古有使狐之事乎、未詳、所以然焉、惟